㈠次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

問題文及び関連の問（問一～八）については非公開とします。（著作権者の意向により許諾を得られなかったため）

問九　通常掲載

㈡　通常掲載

問九　次の1～5の傍線部にあてはまる漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選びなさい。
解答番号は 8 ～ 12 。

1　政府は改正案をカクギ決定する予定だ。 8
①拡　②覚　③確　④格　⑤閣

2　エネルギー取引についてカンシをする。 9
①館　②観　③監　④官　⑤艦

3　盆地が山をイクエにも取り囲んでいた。 10
①重　②得　③絵　④枝　⑤江

4　複数の業界でケイキョウ感は改善している。 11
①教　②況　③経　④共　⑤京

5　原材料費がコウトウしている。 12
①踏　②当　③棟　④統　⑤騰

Ⅱ　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一九四五年の日本の敗戦にもかかわらず、二〇世紀のアジアは名実ともにパックス・ジャポニカ（日本の平和）と言ってよい時代だった。

その平和は、戦前では日英同盟に支えられており、パックス・ブリタニカ（イギリスの平和）とセットになっていた。ロシアのアジアへの勢力伸張を防遏（ぼうあつ）するという共通の目的の下、極東の小さな島国に過ぎなかった日本は一九〇二年、世界に冠たる大英帝国の同盟国になった。そして一九〇五年、一九一一年と同盟が改定されるたびに、日本はアジアの帝国としてその存在感を増す一方、第一次世界大戦では日英同盟を根拠に参戦し、中国の一部や南太平洋地域に勢力を広げることに成功したのである。それは、後に戦後、朝鮮戦争を「天佑神助（てんゆうしんじょ）」と呼んだ吉田茂（よしだしげる）元首相に倣（なら）って言えば、第一の「天佑」だったと言える。

A 、満州をめぐる日米の対立に巻き込まれることへのイギリスの懸念が増し、一九二一～一九二二年のワシントン会議で日米英仏の四カ国条約が結ばれたのを機に、日英同盟は破棄に至った。その後、よく知られているように、日本は満州事変を引き起こし、一五年戦争へと突入していくことになる。

イギリスは同盟国から中国・東南アジアでの権益を争う敵対国へと変わり、「B 太平洋戦争」は中国・東南アジアでイギリスと対峙（たいじ）した「アジア太平洋戦争」でもあった。この戦争を「大東亜戦争」と呼んだ日本は、「ヨーロッパからアジアを解放する」と謳（うた）い、一九四一年一二月八日の開戦時には、真珠湾攻撃とともにイギリスが支配するマレー半島への攻撃を開始し、やがてイギリス領ビルマまで軍を進めることになった。

大東亜共栄圏建設を目指してアジア各地を転戦した日本の名は、一九四五年八月一五日を境に、本書一一四頁（ページ）の「戦争一覧」の表から姿を消す。しかし、その後も日本は戦争とまったく無縁だったわけではない。

なぜ日本が平和であり続けられたのかという問いは、平和憲法のみにその答えを帰せられるものではない。また、日米安保という「同盟関係」の抑止効果だけで答えられるわけでもない。

平和憲法があるがゆえに、日米安保があるがゆえに、日本では戦後、ずっと「平和」が続いた――この二者択一的な問題設定が、何を視界から消しているかは明らかだ。東アジアの戦後がほとんど視界から消え失せているのである。

一九六〇年代の終わりに自由主義陣営で世界第二位の経済大国となり、冷戦終結後、名実ともにアメリカに次ぐ経済大国になった日本は、パックス・アメリカーナ（アメリカの平和）の下にあった。朝鮮戦争の最中の一九五一年、サンフランシスコ講和条約と同時に調印された日米安全保障条約は、いわば対英米戦争に突き進んだ反省の上に立った戦後版の日英同盟であり、アメリカにとっては、日本はアジアの共産国家（北朝鮮と中国）を封じ込めるための「コーナーストーン」であった。

日本に対して軍政ではなく、沖縄など一部の地域を除いて間接統治による占領を実施したアメリカは、当初はデモクラシーの「宣教師」のごとく振る舞い、日本の非軍事化と民主化を推し進めた。しかし東西冷戦の激化とともに、次第に経済復興を重視する「逆コース（政治的反動化）」へと転じていったことはよく知られている通りだ。その決定打となったのが朝鮮戦争である。

当時政権を担っていた吉田茂首相は、日本が朝鮮戦争における補給基地としての役割を担うことの代償として安全保障を確保する道を選んだ。これによって大量の軍事物資をはじめとする巨大な特需が生まれ、在日国連軍将兵の消費などの間接特需も含めれば、その総額は一九五五年までで三六億ドルにも上った。いみじくも吉田茂が「 C 」と呼んだ朝鮮戦争は、日本の戦後復興にはずみをつけ、アメリカとの二国間同盟である日米安保を軸に戦後日本の政治体制の基盤が固められていく。その日本側の推進者が、A級戦犯容疑をかけられたものの、その後、不死鳥のように蘇って日米安保改定の立役者となった岸信介である。

その岸をブローカー役に、日米安保という対外的な機軸に対応する国内的な機軸となったのが、保守合同＝自由民主党の誕生だった。[D]このふたつの支柱によって戦後日本のレジームの骨格は固まったことになる。日米安保と五五年体制というふたつのシステムこそ、戦後日本の長期にわたる保守政権の存続の要であった。

ただ、『朝鮮戦争の起源』の著者ブルース・カミングスが指摘しているように、日本の「一国内平和」は、沖縄と韓国という「緩衝地帯」なくして成り立ち得なかったはずだ。沖縄は基地という形で、そして韓国は最小限の防衛力を補完する「兵営国家」、対共産主義に対する「諜報国家」の防壁という形で、アメリカを仲立ちにして「平和国家」日本に結びつけられていたのである。

もし朝鮮戦争で釜山に赤旗が翻ることになっていたとしたら、日本の防衛ラインは対馬海峡に迫り、平和憲法に基づく最小限の「防衛力」や専守防衛、防衛費の上限GDP一パーセントといった戦後日本の基本的な防衛戦略は、とっくに骨抜きになっていたのではないだろうか。カミングスが示唆しているように、憲法改正も早期に実現され、韓国と同じように過酷な「情報政治」が敷かれていた可能性も否定できない。

こうして見れば、日本の「一国内平和」と韓国の「軍事独裁・兵営国家」とは、海峡を挟んで表裏のようにつながっていたのである。いわば、韓国は日本の安全保障や防衛戦略の一部を引き受け、肩代わりしてくれたということだ。このような海峡を挟んだ反共国家、日韓の「癒着」の舞台裏で最大のフィクサーとして暗躍したのが、首相退任後の「昭和の妖怪」、岸信介であった。多くの日韓両国民にとって、海峡はふたつの主権国家を分かつ国境線であったとしても、両国の軍事政権と保守政権にとっては同じ勢力圏内の内海のようなものだったことになる。

だからこそ、明白な日本の国家主権の侵害であるとともに人権侵害であり、したがって被害者の「原状復帰」が不可欠だったはずの「金大中拉致事件」は、「政治決着」によって蓋をされたのである。

生前、金大中氏が、大統領在任中に「金大中拉致事件」の真相解明と「原状復帰」をめぐって、日本政府の新たな対応を敢えて外交的なイッシューにしなかった真意を唇を噛むように切々と語っていた姿が目に浮かぶ。そこには、未来志向による「日韓新時代」を掲げた政治家の決断に至る内心の葛藤が垣間見えた。

[E]、日米安保と五五年体制から成り立つ戦後日本のシステムは、[F]沖縄と韓国というサブシステムを組み込んだ複合的なシステムとなったのである。

日本と関わりのあった「アジアの戦争」は、朝鮮戦争だけではない。戦前の日本にとって「 G 」は原料と食糧の供給地であるとともに、日本の工業製品の市場となる経済的後背地（ヒンターランド、hinterland）であった。戦後、アメリカはそこから「レッド・チャイナ（中華人民共和国）」を除外し、韓国、台湾、そして東南アジア諸国を日本復興の後背地として差し出した。そして、自らも勢力範囲を広げていく過程で生じた東南アジアにおけるイギリス、フランスとの間の軋轢が、やがてベトナム戦争へとつな

がっていく。さらに、一九七二年の日本復帰まで、沖縄がアメリカの軍政下にあったことも忘れてはならない。日本の米軍専用施設面積の約七割が集中する沖縄は、今もアジアにおけるアメリカの重要な軍事拠点であり、その戦略的な「価値」は米中対立とともにますます、高まりつつある。

「戦後の日本は平和になった」。「戦後日本は『正規軍』がひとりとして殺し、殺されたことのない希有な平和国家である。だから平和憲法を守らなければならない」。こうした戦後日本の「良心的な」声に私が共感を覚えつつも、釈然としない違和感を拭えないのは、そうした言動が、ベトナム戦争終結のころまでアジアが「戦争まみれ」であったという冷厳な現実に頬被りをしているように思えるからである。

朝鮮戦争に至る過程でも、かつて支配下においた朝鮮半島の人々に対する同情心が国民的な規模で沸き起こることはなかった。確かに戦後の混乱は終息しておらず、インフレ克服のためのドッジライン（一九四九年の金融引き締め）後、日本経済は地を這うような低迷に喘ぎ、国民の多くが困窮に苦しんでいたことは否定できない。それでも、一九五二年、大阪府豊中市に集まった労働者、「在日朝鮮人」、学生たちが吹田操車場まで反戦・軍事輸送反対のデモを行い、大規模な「騒乱」にまで展開した「吹田事件」などがあったことを見落としてはならない。

しかし、それらの動きは散発的な運動にとどまり、戦争の「特需」は日本経済が戦後の混乱から脱却する決定的なモメンタムとなったのである。さらに、横田基地から飛び立ったB29が北朝鮮を空襲・空爆したことに、多くの日本人は気づかないままであった。しかも、およそ二〇〇〇人の日本人が米軍から「徴用」され、米軍上陸の水先案内人になった歴史は、最近に至るまで明らかにされていなかった。明らかに、戦後の日本は、間接的に朝鮮戦争に巻き込まれていたのである。

H、内戦で死線をさまよった韓国が、今度はベトナム戦争で延べ三〇万以上の兵力を派遣していることも見落とせない。それが、内戦以後の「漢江の奇跡（一九六〇年代以降の驚異的な経済復興）」の起爆剤になり、韓国財閥（チェボル）台頭のモメンタムになったことはよく知られている通りだ。

にもかかわらず、現在では韓越貿易は空前の額に達し、ベトナムは韓国最大の貿易黒字の国になり、在韓外国人のうちベトナム

人の占める割合は韓国系中国人に次ぐ多さになっている。

かつて駐日アメリカ大使館の政務担当者と会ったときの言葉が耳朶に残っている。「姜先生、干戈を交え、悲惨な戦争で多大の犠牲者を出しても、やがて親密な友好国になれるものなんです。だって今ではベトナムは親米的な国ですし、そもそも日本がそうじゃありませんか」。そう嘯きながら、暗に北朝鮮とも将来、そうした関係にならないとどうして言えますかと、彼の含み笑いが私に問いかけているようだった。確かに冷厳でドライな「国家理性」の狡智からすれば、その時々に「最大の」国益に仕えることが、パワーポリティックスの鉄則なのかもしれない。

しかし、そこからはじき出された人々の犠牲はただ忘れ去られ、踏みにじられたままでいいのか、忸怩たる思いが私の気持ちを暗くする。

（中略）

ゲルツェンの『向こう岸から』を敷衍して、「歴史のクズ」と思われた少数者の立場から一八四八年の三月革命を読み直した良知力の『向う岸からの世界史』に倣って、東アジアの歴史を読み直すときは来るのだろうか。良知の『世界史』が出版されたのが一九七八年であり、その翌年、ドイツ留学への空の旅の無聊を慰めてくれたのがまさにこの本だったのだ。大文字の大義やイデオロギーで埋め尽くされた時代の瘡蓋を取り外してそこから見える生きた歴史。良知の『世界史』は、その輝かしい金字塔のひとつだった。

冷戦期もまた、大文字の大義とイデオロギーが地球を覆った時代であると言えるだろう。

ウォーラーステインの言葉を借りれば、冷戦は「第一次世界大戦後のウィルソン的な理想主義とレーニン主義の対立」に端を発する、一国の枠を超えた「理想主義」を力によって実現しようとするふたつの原理主義同士の角逐であった。

冷戦の終結は、「戦略防衛構想（SDI）」、別名「スターウォーズ計画」を打ち出したレーガン政権のアメリカから見れば、ソ連邦という「悪の帝国」に対する「デモクラシーの帝国」の勝利ということになるはずだ。しかし同時に、そのことは新たな「正義と悪」の二項対立の始まりにもなった。

そうした世界を「善」と「悪」に大きく分ける形での［J］は、旧ソ連邦が解体された後も変奏曲を奏でながら残存し、冷戦終結後、世界は一極支配のユニラテラリズム＝単独行動主義に走る超大国・アメリカが体現する新たな「普遍性（グローバル・スタンダード）」によって覆われ、「非欧米（中東・アジア）」の「特殊化」が進んでいくことになる。

9・11テロの衝撃の後、アメリカのジョージ・W・ブッシュ大統領が、二〇〇二年一月の一般教書演説で北朝鮮、イラン、イラクを「悪の枢軸（axis of evil）」と名指ししたのは、その一例である。ブッシュ大統領は、この三カ国がテロリスト支援、核や化学兵器などの大量破壊兵器の保有、そして人権や自由に対する抑圧を行っていると非難し、対決姿勢を鮮明に打ち出した。「対テロ戦争」として始められたアフガニスタン侵攻やイラク戦争は、アメリカ主導の下、「普遍」を掲げて「特殊」を打ち負かす戦いであった。

（中略）

冷戦後の世界のもうひとつの特徴は、ナショナリズムの浮上である。グローバル経済の進展に伴い、国民国家の限界が明らかになっていくと同時に、人々は自分たちのアイデンティティをつなぎ止めるべく民族国家にその拠り所を求めた。しかしそうした民族意識の高まりは、バルカン半島の諸民族を統合していたユーゴスラビア連邦で「民族浄化」の凄惨な殺戮劇となって世界を震撼させた。また、イスラームやキリスト教の原理主義的な復興運動が活性化し、フランスの政治学者ジル・ケペルが「宗教の復讐」と呼んだような現象が見られるようになった。

こうした民族的なアイデンティティや宗教的な帰属を求める動きは、エスノセントリック（自民族中心主義的）な「歴史修正主義」の動きを促進することになった。ナショナルな記憶や物語の捏造と修正が多様な媒体を通じて国民の中にナルシズム的な感情を作り出し、やがて「歴史」がナショナリズムを競い合うアリーナ（闘争場）になっていくのである。

特に日中・日韓の間での過去の歴史をめぐる解釈や評価は、冷戦終結以後、一部メディアで「歴史戦」と言われるほど熾烈化し、それぞれの国内の国民的な「感情構造」も絡んで、東アジアの日中韓三カ国の間に複雑な波紋を投じることになった。

（姜尚中『アジアを生きる』集英社　二〇二三年より引用　問題作成の都合上一部変更）

問一　空欄部［A］、［E］、［H］に入る語句の組合せとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は［13］。

	A	E	H
①	しかし	もっとも	つまり
②	しかし	だが	ただし
③	例えば	このように	もっとも
④	しかし	このように	もっとも
⑤	例えば	だが	つまり

問二　傍線部B「太平洋戦争」とあるが、この戦争中（一九四一年～一九四五年）に出版された文学作品と作者の組み合わせとして適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は［14］。

① 「山月記」　中島敦
② 「吾輩は猫である」　夏目漱石
③ 「細雪」　川端康成
④ 「羅生門」　太宰治
⑤ 「注文の多い料理店」　宮沢賢治

問三　空欄部 C 、 G 、 J に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 15 。

① C：大東亜戦争　G：東南アジア　J：一元論
② C：天佑神助　G：東南アジア　J：二元論
③ C：アジアの戦争　G：大東亜共栄圏　J：一元論
④ C：大東亜戦争　G：天佑神助　J：二元論
⑤ C：天佑神助　G：大東亜共栄圏　J：二元論

問四　傍線部D「このふたつの支柱によって戦後日本のレジームの骨格は固まったことになる」の意味として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 16 。

① 日米安保と自由民主党の誕生が戦後日本の政治体制の基盤となった。
② 岸信介がブローカーとして活躍し、保守合同＝自由民主党という体制をつくった。
③ 岸信介は、A旧戦犯容疑をかけられたにもかかわらず、日米安保の立役者になった。
④ 日本の「一国内平和」は、沖縄と韓国という「緩衝地帯」があったから成立した。
⑤ 日本は、朝鮮戦争における補給基地としての役割を担う形で、「平和国家」となった。

問五　傍線部F「沖縄と韓国というサブシステム」とは具体的にどのようなことを指すと考えられるかを、次の形式に従って四十五字以内で記しなさい。ただし、「防壁」という語を必ず用いること。解答は 国語解答用紙 。

四十五字以内 システム。

問六　傍線部I「そこからはじき出された人々の犠牲はただ忘れ去られ、踏みにじられたままでいいのか」とあるが、この部分の「はじき出された人々」の説明として最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 17 。

① 戦争による特需で大きな利益をあげた企業の従業員。
② 戦争を引き起こした政治家たち。
③ 「国家理性」によって切り捨てられた戦争の犠牲者。
④ 戦争によって大きな被害を受けた日本人と韓国人。
⑤ 吹田操車場まで反戦・軍事輸送反対のデモを行った人々。

問七　傍線部K「冷戦終結後」とあるが、筆者が考える冷戦終結後の世界の特徴として適切なものを、次の①～⑤の中から二つ選びなさい。解答番号は 18 。

① 日本がアジアにおける唯一の経済大国として世界をリードしている。
② アメリカが体現する新たな「普遍性（グローバル・スタンダード）」によって覆われている。
③ 日中・日韓の間での過去の歴史をめぐる解釈や評価が日本経済の低迷を招いている。
④ 国際連合が世界平和の維持に貢献し、民族間の紛争がほぼ起こらなくなった。
⑤ 民族的なアイデンティティや宗教的な帰属の動きが起こっている。

問八　本文の内容として適切なものを、次の①～⑤の中から二つ選びなさい。解答番号は 19 。

① 戦後のパックス・ジャポニカ（日本の平和）は、朝鮮戦争の特需が大きな要因の一つである。
② 戦後のパックス・ジャポニカ（日本の平和）は、平和憲法がその最大の要因である。
③ 中国・東南アジアの近年の発展には、日米同盟や日米安保といった日本の外交政策が大きく影響している。
④ ベトナム戦争終結のころまでアジアが「戦争まみれ」であったのに、戦後日本の平和に向けられた声がその現実を無視しているようで違和感がある。
⑤ 日英同盟は、戦前も戦後も日本経済の発展に大きく寄与している。

問九　次の1～5の傍線部にあてはまる漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選びなさい。解答番号は 20 ～ 24 。

1　これからの時代はソウイ工夫が求められる。 20
① 創　② 総　③ 相　④ 総　⑤ 壮

2　いつもジュッコウする彼の意見を聞こう。 21
① 口　② 校　③ 行　④ 考　⑤ 孝

3　芸術はジウのように心に響くものである。 22
① 示　② 時　③ 磁　④ 自　⑤ 慈

4　自分の思慮の浅さをモウセイした。 23
① 妄　② 猛　③ 毛　④ 盲　⑤ 網

5　日本は本協定にはヒジュンしていない。 24
① 準　② 順　③ 准　④ 純　⑤ 潤